

2020年7月26日 礼拝説教要旨

詩編講解説教24 「栄光の王」

詩編24：1～10、ヨハネ12：12～15

詩編第24編は7節以下のところで「栄光に輝く王」として神さまが来られると繰り返します。その場合わたしたちは神さまをお迎えする立場になります。迎えるということは大変なことです。私どもの教会はよく集会の会場になることが多い。熊本は九州のほぼ真ん中に位置していますから九州各地からここに集まります。迎える側になると、やれお弁当はどこがいいか、お茶菓子は何がいいか。掃除をしたり、お花を飾ったり、いろいろと準備をしなくてははいけない。また講師を迎えるとなると、その宿泊や送迎などもありますから大変です。遠いところをわざわざ集まって来られるわけですから、少しでも気持ちよく過ごしていただきたいと思います。そういうおもてなしの心で迎えるのです。

人間同士の関係でもそうですから、神さまを迎えるということになれば、わたしたちは一体どのような準備をして臨めばいいのでしょうか。3節以下に注目してください。ここに神さまを迎える相応しさが記されていると理解してよいでしょう。でもわたしたちはこれに適っているのでしょうか。「潔白な手と清い心」（4節）とあります。これは手の業、行動と心、内面が共に清く、表裏がないということです。もう既にここでわたしたちは怪しくなります。よく本音と建前と言いますが、そういう二面性をわたしたちは持ちます。表向きには善人を装うことだってあるでしょう。また「むなしいもの」「欺くもの」（4節）はいずれも偶像を意味しています。神さまではないものを神さまのようにして拝み依り頼むこと。それが偶像礼拝ですが、そういう偶像に魂を奪われてしまうのです。これはそういう偶像を信仰の対象にするということだけに限りません。例えば、お金に魂を奪われてしまうということがあるでしょう。何か依存することもそうでしょうし、自分のこだわりのようなものに支配されてしまうこともあります。それも偶像礼拝です。そうするとわたしたちは神さまを迎えることができません。その人の中にはもはや神さまをお迎えする余地がないのです。聖書の伝えるクリスマスのお話で、主イエスがお生まれになられる時にベツレヘムの宿屋がいっぱいだったという話がありますが、それは基本的にわたしたちは自分の心に救い主をお迎えすることができないということを象徴的に表しております。

そしてさらに重要なことがあります。7節に「城門よ、頭を上げよ。とこしえの門よ、身を起こせ」とあります。「城門」「門」というのは、これは古代の街の作りですが、特にエルサレムの街は、周囲が城壁で囲まれています。これは主に敵の侵入を防ぐための構造ですが、これも意味深いことです。つまりわたしたちもまた自分が自分の国の王様であって、その心は外部からの侵入を拒み、硬く閉ざしているということです。例えば、わたしたちは自分が支配していると思っているところに誰かが入って来ることを嫌う傾向にあります。何か自分が専門にしているところに誰かが意見を言ったり、忠告することを嫌がるでしょう。余計なことを言うなどムキになる。誰かがそこに入ってきて、自分の権威が脅かされるものなら、必死になってそれを守ろうとします。そういう意味で、わたしたちは自分の国の王様であって、そこでは基本的に新しい王が来られることを拒否する傾向にあるのです。これもクリスマスのお話ですが、ヘロデ王がキリストの誕生を素直に喜ばずに、2歳以下の男の子を皆殺しにしたという悲しい話があります。クリスマスというのはまさに新しい王キリストの誕生なのですが、この王の誕生を受け入れられないわたしたちの姿が明らかにされています。

わたしたちが信仰を持つということはこの自分の中に、その硬い心の城壁の中に、新しい王を迎えるということです。そこでは自分から神さまへ支配者が代わるのです。それは天地万物を造られ、これを完成に導く愛と恵みの神さまのご支配の中に入ることなのですが、ご承知のように、わたしたちはそのことを素直に喜ぶことができないのです。その証拠に新しい王として来られたイエス・キリストを結局わたしたちは十字架につけて殺してしまいました。新しい王を排除してしまったのです。そこに聖書の示すわたしたちの罪の本質があります。

でも話はそれで終わりではありません。新しい王であるキリストを十字架にかけて殺し排除したと思っていたけれども、実はそうではなかったのです。キリストの十字架の死は、このわたし自身の死でありました。新しい王を受け入れず、排除する罪のわたしがそこでキリストと共に死んだのです。そしてイエス・キリストは三日目によみがえられました。それは罪に死んだわたしたちがキリストと共によみがえり、新しい王をお迎えすることのできる新しいわたしとして立ち上がるためであります。それは新しい王のご支配を喜ぶわたしの始まりであり、また4節にあるような「潔白な手と清い心を持つ人」となり、「むなしいものに魂を奪われることなく、欺くものによって誓うことをしない人」として新しく生き始めることなのです。キリストの十字架とよみがえりがそれを可能にしました。それゆえに7節「城門よ、頭を上げよ。とこしえの門よ、身を起こせ」これは擬人化されている表現ですが、それはわたしたち自身がキリストのよみがえりによって、罪の支配から立ち上がり、頭を上げて、身を起こして、栄光に輝く王を迎えることを表しています。

ヨハネの黙示録に「見よ、わたしは戸口に立ってたたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」(3:20)とあります。今日も主イエスは栄光に輝く王としてわたしたちの心の扉を叩いておられます。もちろんわたしたちには栄光に輝く王を迎える相応しさはありません。でも神さまを迎える相応しさはわたしが作るものではありません。キリストが十字架とよみがえりの御業によって、罪を滅ぼし、硬い城壁を撃ち壊し、栄光の王を迎えるに相応しいわたしにしてください。わたしたちはただその恵みを心開いて受け入れるだけです。そこから新しいわたしが始まるのです。

天の父よ。あなたをお迎えする相応しさはありません。それどころか新しい王のご支配を嫌い、これを排除するわたしたちです。しかしそのようなわたしたちを赦し、わたしたちが頭を上げて、主を迎えることができるように、十字架とよみがえりの御業によって頑なな心の城壁を打ち砕いてくださいました。この恵みに感謝して、心から喜んで新しい王を心のうちにお迎えすることができますように導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。